

## 「千の風になって」考

中央仏教学院講師 清岡隆文



私のお墓の前で  
泣かないでください  
そこに私はいません  
眠ってなんかいません

これは、いま多くの人々によって愛唱されている「千の風になって」の冒頭の歌詞です。各地の寺院のコーラスにおいても、よく歌われています。とくにこの最初のことばが新鮮なひびきをもって、共感の輪をひろげているようです。その昔、讃岐国（香川県）の庄松（1799—1871）さんのエピソードとして、つぎのようなことが語り継がれています。臨終が近づいたころ、仲間が「あんたが死んだら墓をたててあげましょう」といったとき、庄松さんが「石の下にはおらぬ」と反対したというのです。阿弥陀如来の本願に帰し、お念仏のなかで、まことのよるこびの生活をまっとうされた人を妙好人とたたえています。庄松さんもそのひとりです。いまから130年以上も前に言われた、この歌詞のころは決して目新しいものではないのです。この歌に人気が集まるのは、むしろそれに続く「千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています」や「秋には光になって 畑にふりそそぐ」、「冬はダイヤのように きらめく雪になる」、「朝は鳥になってあなたを目覚めさせる」、「夜は星になって あなたを見守る」にあるようです。親鸞聖人は「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり」（『顕浄土真実教行証文類』『註釈版聖典』135頁）と示され、「正信偈」では、「往還の回向は他力による」と記されています。他力とは、阿弥陀如来の本願力回向のはたらきをいい、その本願力回向に往相と還相があります。往相とは、衆生が浄土に往生していくすがたで、還相とは、大悲心をもって十方の衆生をすくうためにこの世に還り来るすがたをいうのです。この浄土真宗の教義と「千の風になって」の接点について考えています。現在、自然への回帰の流れに沿ってこの歌が愛唱されているとするならば、既成の宗教から離れる傾向を後押しするのではないかと先走って不安を抱くことになります。多くの門信徒が気持ちよく、楽しんで歌っている姿にほのほのとしたものを感じながら、なお一層、聴聞の大切さを強調せずにおれません。

（真宗担当）